

「イエスの宮清め」(祈りの家) (マルコ11:12~26)

挽地茂男

2018.9.23 日本基督教団千歳丘教会

本日の箇所の前半(1:1-11)は、8月19日に平和との関連でお話ししましたので、割愛とさせていただきますが、9月2日から始まりました礼拝の音声配信を聞いていて下さる方もおられますので、聖書朗読に入れさせて頂きました。内容は文書の



形でHPに掲載させて頂けると思いますのでそちらをご参照下さい。

さて今日の箇所は、マルコ福音書に特徴的なサンドイッチ技法が使われています。皆さんと一緒に、「ベルゼブル論争」や「長血の女の癒し」の物語を学んだときに、このサンドイッチ技法が使われていることを確認しました。つまりマルコは一つの

物語を二つに割って、間に別の物語を挟み込みます。今日の箇所では、「いちじくの木」の物語を二つに割って、間に「宮清め」の物語を挟んでいます。二つに割られた外側の物語と、間に挟まれた内側の物語は互いに説明し合う関係にあります。

さて、いちじくの物語の前半部を見てみましょう。12-14節。

11:12 翌日、一行が〔エルサレムを目指して〕ベタニアを出るとき、イエスは空腹を覚えられた。11:13 そこで、葉の茂ったいちじくの木を遠くから見て、実がなっていないかと近寄ら



れたが、葉のほかは何もなかった。いちじくの季節ではなかったからである。11:14 イエスはその木に向かって、「今から後いつまでも、お前から実を食べる者がいないように」と言われた。弟子たちはこれを聞いていた。

主イエスはエルサレムに入城したその日の夜は城外のベタニアで過ごし、翌日、再びエルサレムにやってこられます。そのベタニアを出たときでした。主イエスは空腹を覚えて、

いちじくの木の話 I

宮 清 め

いちじくの木の話 II

葉の茂ったいちじくの木に実がなっていないか確かめようと木に近づいてこられます。実はなっていませんでした。「いちじくの季節ではなかった」からです。主イエスはいちじくの木を呪います。「今から後いつまでも、お前から実を食べる者がいないように」。一般的な感覚からすれば、季節でもないのにいちじくに実を期待する方が理不尽で、おまけに実がついていないからといって呪うなんて、いささか大人げない、とお思いになることでしょう。しかしこの主イエスの理不尽な行動を理解するために、マルコの福音書において

「いちじく」が特別な教えを語る導入部で使われていることを確認



しておきたいと思います。例えば、マルコの13章28－31節です。

「13:28 いちじくの木から教えを学びなさい」と投げかけて「枝が柔らかくなり、葉が伸びると、夏の近づいたことが分かる。13:29 それと同じように、あなたがたは、これらのことが起こるを見たら、人の子が戸口に近づいていると悟りなさい。」いちじくの生育ぶりから季節が分かるよう

に、社会や世界に起こる出来事を手がかりにして「人の子が戸口に近づいている」つまり世の終わり、終末の近いことを学べというのです。いちじくは「学ぶべきこと」を導入するときにてできます。さらにわたしたちは、マルコのサンドイッチ技法を心に留めておくべきです。いちじくの物語と、神殿の宮清めの物語がサンドイッチにされていることから、いちじくの木を物語を理解するには、神殿の物語がヒントとなり、神殿の物語を理解するためには、いちじくの物語がヒントになるのです。いちじくの物語は、神殿の物語と並行的に――そして意味においても並行的に――語られているのです。

いちじくは花が咲かないので「無花果」と書きますが〔実際は花が咲かないように見えるだけ〕、遠くからは、まずは葉が目に入ります。主イエスも葉が茂っているので、いちじくの木に近づきます。しかし近づいてみると、実がなっていないのです。「いちじくの季節ではなかった」からです。この「葉の茂ったいちじくの木」はエルサレム神殿を象徴しています。神殿の建物や神殿祭儀や運営の表面的な繁栄〔虚栄〕は、人の目に映り、人を引き寄せます。し

かし近づくと、「**実がなっ**て**はい**な****」
かったのです。この実という字は、
「じつ」とも読めます。エルサレム
神殿に近づいてみると、そこには「祈
りの家」としての実が、「じつ」が
なかったのです。植物のいちじくで
あれば季節を待てば、実をつけるで
しょう。しかし主イエスの眼には、
神殿はもはや、待ってもその実を回
復することを期待できる状態ではな
かったのです。

さらに旧約聖書では、いちじくの
葉は実態を隠すものとして登場しま
す。創世記3章6－7節(墮罪物語)。
**創3:6 女が見ると、その木はいかに
もおいしそうで、目を引き付け、賢
くなるように唆していた。女は実を
取って食べ、一緒にいた男にも渡し
たので、彼も食べた。 3:7 二人の
目は開け、自分たちが裸であることを
知り、二人はいちじくの葉をつづ
り合わせ、腰を覆うものとした。**
エデンの園でアダムとエヴァが、罪
を犯した後、腰にまとったいちじく
の葉が覆い隠したのは、彼らの目に
恥ずかしいと映った自分たちの姿で
した。いちじくの葉では完全に隠せ
るはずありません。しかしそのい
ちじくの葉で不完全に自らの恥ずべ
き姿を隠しながら、彼らが覆い隠そ

うとしていたものの内実は、人間の
罪であり、神への反逆なのです。

繁る葉に覆われたイチジク、 繁
る葉のように賑わいを見せるエルサ
レム神殿、そこには実(じつ)がな
かったのです。いちじくの木に近づ
くと実がなっていないませんでした。エ
ルサレム神殿に近づくと、そこにも
実がなっていなかったのです。主イ
エスの呪いが、
その口から発せ
られます。「**今
から後いつまで
も、お前から実
を食べる者が**ない**ように**」。



そしてこの呪いは、主イエスが神
殿境内に至ると、神殿の現実(実態)
を断罪するイエスの行動として具体
化します。15－19節。サンドイ
ッチにされた宮清めの部分です。
**11:15 それから、一行はエルサレム
に来た。イエスは神殿の境内に入り、
そこで売り買いしていた人々を追
い出し始め、両替人の台や鳩を売る者
の腰掛けをひっくり返された。11:1
6 また、境内を通過して物を運ぶこと
もお許しにならなかった。11:17 そ
して、人々に教えて言われた。「こ
う書いてあるではないか。『わたし
の家は、すべての国の人の／祈りの**

家と呼ばれるべきである。』／ところが、あなたたちは／それを強盗の巢にしてしまった。」11:18 祭司長たちや律法学者たちはこれを聞いて、イエスをどのようにして殺そうかと謀った。群衆が皆その教えに打たれていたもので、彼らはイエスを恐れたからである。11:19 夕方になると、イエスは弟子たちと都の外に出て行かれた。

神殿の現実はどうなっていたのでしょうか。神殿に今なっている果実は、どのような果実でしょうか。実はついていなかったのです。神殿は、神殿経済共同体と化していました。神殿で商いをする神殿商人と、それを管理する神殿貴族とが作り上げる経済的なシステムがこの神殿の実（実態）だったのです。神殿に献げる犠牲の動物を売る商人。遠くから、特に外地から参詣にやって来るユダヤ人にとっては、便利な、便利なというよりはなくてはならない商いです。神殿に献げる貨幣には肖像があります。皇帝や異教の神々や偉人たちの肖像は偶像礼拝になるからです。そのような肖像のついた貨幣を、肖像の

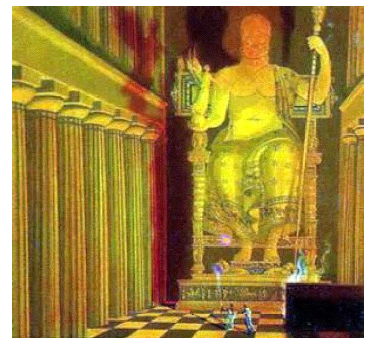


ついていない貨幣に交換してくれる両替商。これもなくではならない商いだったのです。しかし主イエスは、



神殿から商人たちを追い出し始めます。主イエスの「宮清め」が始まりました。この神殿の出来事は、よく「イエスの宮清め」という呼び方がなされます。

実際の「宮清め」はユダヤのお祭りです。ヘブライ語では、〈ハヌカー^{ハヌカー}〉の祭と呼ばれます。この「宮清め」の祭りは、マカバイ（マカベア）戦争〔167-65 B.C./ Maccabean revolt〕という紀元前167－165年にかけてユダヤ人が戦った戦争にその起源があります。当時の世界の覇権を握っていたセレウコス朝シリアの王アンティオコス4世エピファネスのヘレニズム化——ギリシア的な文化・宗教を押しつける——政策に対する反乱として起こります〔※現在この説は修正されつつある〕。アンティオコス4世はユダヤ人に、ユダヤ教の律法に基づいて生活すること〔割礼や安息日〕を禁じ、



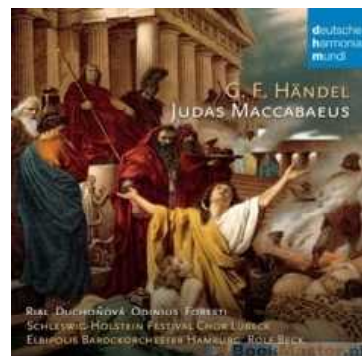
巨大なゼウス像

エルサレム神殿にゼウスの像を安置します。これに対して（地方都市モディンの）祭司マタティアと5人の息子たち（ヨハネ、シモン、ユダ、エレアザル、ヨナタン）が反旗を翻します。この戦争の立役者・英雄ユダ・マカバイ（マカベア）にちなんで、この戦争は、マカバイ（マカベア）戦争とよばれます。このユダヤ人の反乱とそれに続く戦争によって、ついに、ゼウスの神殿と化していたエルサレム神殿から異教（ヘレニズム）的な司祭たちが追放され、異教の祭壇が撤去されて神殿が清められます。こうして、再びイスラエルの神に真の礼拝と祈りが捧げられるようになったのです（紀元前165年12月25日）。この出来事を記念して現在に伝わる祭が〈ハヌカーの祭〉です。このハヌカーの祭は、〈宮清めの祭〉とも、〈奉献の祭（Feast of Dedication）〉とも、〈光の祭（Festival of Lights）〉とも呼ばれ



ます。〔この祭は、キスレーウ月（ユダヤ暦の第9月）の25日から8日間祝う。陰暦の移動祭日だが、12月に当たることが多いので、祭の由来も意味も全く異なるが、ユダヤ教のクリスマスと呼ばれることもある。グレゴリオ暦との対照すると、2016年は12月24日が、2017年は12月12日が祭日に当たる〕。

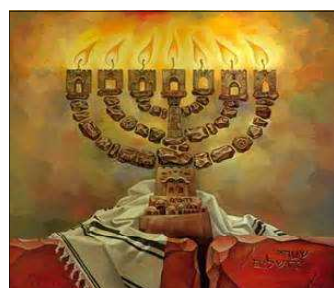
みなさんはヘンデルの「ユダス・マカベウス」(Judas Maccabaeus) というオラトリオをご存知でしょうか〔オラトリオ HWV63。初演1747年4月1日コヴェント・ガーデン〕。マカバイ（マカベア）戦争の英雄ユダ・マカバイ（マカベア）〔ラテン語で Judas Maccabaeus〕



を主人公にしたオラトリオです。欧米では、ヘンデルが作曲したオラトリオの中で、「メサイア」となれば人気のあるオラトリオなのです。全部はご存知なくとも、その中の一曲は必ずご存知だと思います。先ほど歌いました讃美歌130番がそれです。このオラトリオの中の凱進行進曲「見よ勇者は帰る」(See the conquering hero comes, Part III,

no.58) という曲です。この曲はかつては近代オリンピックの表彰式に流されていましたし、日本でもスポーツの表彰式のBGMとしてよく知られています。

主イエスがエルサレムに来られたこの時期は、過越祭に近い時期（3－4月）ですから、ハヌカーの祭とは時期が違います。ですから、ハヌカーの祭（宮清めの祭）を直接的にこの主イエスの行動に読み込むことはできません。しかし、民族が大切にする祭は、民族の中に精神的な風土をつくります。祭や宗教行事が長い年月にわたって反復されることにより、人々の中に、ある一定の宗教的心情が生み出され、それが定着していくのは厳然たる事実なのです。この祭が、神殿のあるべき姿に関する民衆の常識や通念を維持し、人々の精神的風土を底支えしていた可能性は否定できないでしょう。



い年月にわたって反復されることにより、人々の中に、ある一定の宗教的心情が生み出され、それが定着していくのは厳然たる事実なのです。この祭が、神殿のあるべき姿に関する民衆の常識や通念を維持し、人々の精神的風土を底支えしていた可能性は否定できないでしょう。

では、主イエスの宮清めが意味するものとは何でしょうか。まず、主イエスが預言者の言葉を引用しておられることに注目しましょう。それはイザヤ56章7節の言葉と、エレ

ミヤ7章11節の言葉を併せたような引用です。それらは神殿の本来の姿を求める預言者たちの言葉です。まず、イザヤ書。

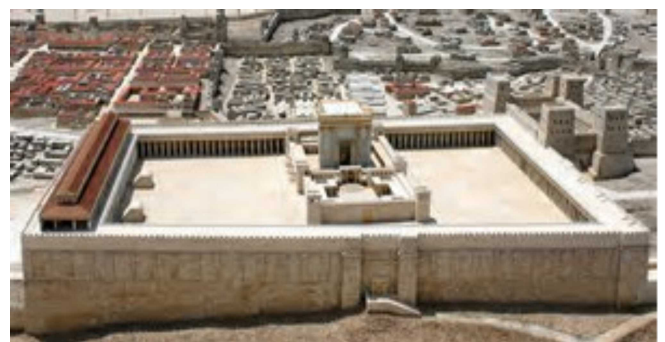
56:7 わたしは彼ら〔異邦人〕を聖なるわたしの山に導き／わたしの祈りの家の喜びの祝いに／連なることを許す。彼らが焼き尽くす献げ物といけにえをささげるなら／わたしの祭壇で、わたしはそれを受け入れる。わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれる。

次にエレミヤ書。

7:11 わたしの名によって呼ばれるこの神殿は、お前たちの目に強盗の巢窟と見えるのか。そのとおり。わたしにもそう見える、と主は言われる。主イエスも預言者と同じ系譜に連なる、神の正義のための受難者なのです。ルカによる福音書に記されたエルサレム途上の主イエスの嘆きをもう一度見ておきましょう。

ルカ13章34－35節。

ルカ13:34 エルサレム、エルサレム、



預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺す者よ、めん鳥が雛を羽の下に集めるように、わたしはお前の子らを何度集めようとしたことか。だが、お前たちは応じようとしなかった。13:35 見よ、**お前たちの家は見捨てられる**。言うておくが、お前たちは、『主の名によって来られる方に、祝福があるように』と言う時が来るまで、決してわたしを見ることがない。」

神殿は今や、信仰の生命が枯れ果てた外面的な宗教施設に化していました。それが外見的にどれほど宗教的に信心深いものに見えても、祈りのないところに真の宗教はないのです。ご利益を求める人々、型どおりの宗教行為をすることで安心を見出す人々、そしてその宗教的営みに利益をあてにして関わる祭司や商人たち。「強盗の巢窟」、主イエスにはそう見えたのです。過越祭には一日に2万頭の羊が神殿で屠られたと言います。その家畜を提供する牧畜業者、しかも犠牲の動物は羊だけではありません。それを商う商人たち、神殿でそれらを屠り献げ物としてさばく神殿の祭司や下役たち。動物たちの残した皮の払い下げを受けて、それを天幕や皮革製品に加工し販売する

皮革業者。また、神殿に詣でる人々の宿泊施設を経営する者たち。神殿は、祭になると、神殿経済共同体、一大神殿経済共同体となるのです。日本の、例えば、京都の祇園祭の人出は(少し古い数字ですが、2006年の京都府警の予測では)135万、その経済効果は(京都府の試算では)330億円と見積もられていました。東北六大祭〔東北六魂祭／青森ねぶた祭、盛岡さんさ踊り、盛岡^{だし}山車、仙台七夕まつり、秋田竿燈まつり、福島わらじまつり〕の経済効果は、少なく見積もっても1500億円とされています。祭が動くと、人が動く、金が動くのです。今や神殿は神殿経済共同体に墮していたのです。そこには信仰と祈り、つまり真の礼拝が欠落していました。

わたしたちが主イエスの行動に感じる「暴力性」は、神殿の本来の姿を取り戻そうとする預言者たちや、マカバイの戦士たちのユダヤ的文脈



から理解されなければなりません。そしてその行動が

単に暴力的であっただけならば、人々の反応が理解できなくなります。暴力的な行動を繰り広げるその人の

言葉に、18節、「**群衆は(が)皆その教えに打たれていた**」のです。その言葉に^{じつ}実を見ていたのです。群衆がその「**教えに打たれ**」る姿を見て宗教指導者たちは主イエスに恐れを抱きます。もう一度18節。「**祭司長たちや律法学者たちはこれ（イエスの語る言葉）を聞いて、イエスをどのようにして殺そうかと謀った。群衆が皆その教えに打たれていた**ので、彼らはイエスを恐れたからである。」神殿経済共同体の存立の危機を感じたのか、それともイエスの言葉に共鳴する群衆——その結果としてイエスを担いだ群衆——による宮清めの拡大、暴動、そして群衆が暴徒化する可能性を恐れたのか、彼らは、イエス殺害の意志を固めます。



しかし騒然とした神殿境内を離れて、イエスは再び都の外に退きます。そして翌朝、あのいちじくの木の下を歩いたとき、主イエスが真の預言者であることが、明らかになりま

す。主イエスが呪った「**あのいちじくの木が根元から枯れてい**」(v.20) なのです。ペトロは昨日のことを思い出して「**先生、御覧ください。あなたが呪われたいちじくの木が、枯れています**」(v.21) と驚きを表わします。それを受けて、主イエスは教え始めます。信仰と祈りについての教えです。今やいちじくの木から学ばなければなりません。主イエスが——「**今から後いつまでも、お前から実を食べる者がないように**」と——預言されたいちじくは、預言の通り、もはや誰も実を食べることのできない状態に、つまり根元から枯れてしまっていたのです。自然の摂理をも超える（ねじ曲げてしまう）主イエスは、まるで自然を創り出した創造者と同じ位置にいます。枯れたいちじくに何の意味があるのでしょうか。ここでもマルコのサンドイッチ技法を思い出しましょう。枯れたいちじくは主イエスの宮清めと並行し、神殿に対する審判を予兆しているのです——その審判についてはマルコ13章で詳細に語られます。そして枯れたいちじくに驚いている弟子たちに、主イエスは、そんなことよりももっと大切なことを教えるのです。

「**神を信じなさい**」(v.22, Ἐχετε



乙女の祈り

πίστιν θεου) と、主イエスは切り出します。そして信仰と祈りについての教えが、諄々と説かれます(v. 22-25)。本当に学ばなければならないのは、このことなのです。この「**神を信じなさい**」という言葉は、直訳すると「あなたがたは神への信頼(信仰)を持ちなさい」となります。この信頼(信仰)という言葉は、ギリシア語では πίστις (ピスティス) という言葉で、信仰とか信頼という意味のほか、真実とか誠実という意味を持ちます。神殿の有様とは対照的な、神の前にある人間のあるべき佇まいを指す言葉です。そして信仰の出来事は人間の信頼(信仰)と神の誠実(真実)、つまり人間の〈ピスティス〉と神の〈ピスティス〉が会うところに生じるのです。祈りは、その信頼と誠実の接触点なのです。23-24節。

11:23 はっきり言うておく。だれでもこの山に向かい、『立ち上がって、海に飛び込め』と言い、少しも疑わず、自分の言うとおりになると信じるならば、そのとおりになる。11:24 だから、言うておく。祈り求めるものはすべて既に得られたと信じなさい。

い。そうすれば、そのとおりになる。信仰の出来事は人間の信頼と神の誠実の出会いの出来事だからです。だから、祈る者は神との信頼関係の中で、心の中のこだわりを解消して、赦しの中に生きる人となっていくのです。25節。「11:25 **立って祈るとき、だれかに対して何か恨みに思うことがあれば、赦してあげなさい。そうすれば、あなたがたの天の父も、あなたがたの過ちを赦してくださる。**」赦しこそ十字架が目指すものだったのです。赦す神と赦される人が、この十字架のイエスを間において、向こうとこちらで、互いに向き合うのです。神と人が十字架において出会うのです。このとき祈りは、この十字架に表された神の心に、自分の心を合わせることでもあるのです。そこでは、罪が赤裸々にされると同時に、赦しが満ちているのです。真の礼拝は、そこにあります。真の礼拝が行われるところ、それが神殿です。信仰と祈りと賛美が満ち



ているところ、それが神殿です。

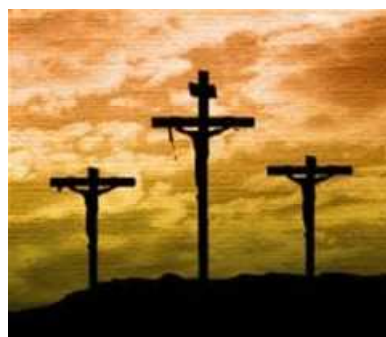
パウロは、わたしたち自身が、神殿だと語りました。しかも神の聖霊の宿る神殿であると言いました(1コリ3:16-17, 6:19)。コリントの信徒への手紙一 6章 19節にはこうあります。
6:19 知らないのですか。あなたがたの体は、神からいただいた聖霊が宿ってくださる神殿であり、あなたがたはもはや自分自身のものではないのです。

「**あなたがたはもはや自分自身のものではない。**」パウロの言葉は横暴な物言いのように聞こえるかもしれませんが。わたしは誰のものでもない、わたし自身のものだ、と言い返したくなります。わたしの人生は、わたしの自己実現のためにあると言いたくなります。しかし違うのです。神に造られた人間は、神と共に、神の心を心として生きるべき存在としてつくられているのです。人が「神の像」かたちにつくられているとは、そういうことなのです。パウロの思いは、主イエスがああ「宮清め」で見せた思いと同じなのです。彼は、真の礼拝がささげられる神殿を求めているのです。真の神殿、真の礼拝者を求めているのです。今読みましたコリント書の続きはこうなります。

一コリ 6:20 あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。だから、自分の体で神の栄光を現しなさい。

神の栄光は、神に対する真の礼拝、信仰と祈りのあるところに現れます。わたしたちが真の礼拝を献げる者となるために、主イエスは、自分の生命を献げて、贖いの代価となられたのです。それに答えて、今度はわたしたちが、あの枯れたいちじくとは違って、実を实らせるのです。

しかし、神の栄光を現すとは、自分を抑制し、自分を制限しながら抹香臭く生きるということではないのです。自分に与えられた賜物(才能)を十全に発揮しながら、神の助けによって生きることによって、隣人を生かし、社会を生かすことなのです。十字架のメッセージとは、平たく言ってしまえばこういうことではないのでしょうか。「すべての罪はわた



しが引き受けた、あなたは、わたしを信頼して思いっきり生きなさい。」そういう

うことではなかったでしょうか。三村さんと毎週日曜の朝お祈りを続けています。そのお祈りの中で、素晴

らしい言葉に出会います。このような祈りです。「来たる一週間も御心になかった精一杯の一週間でありますように。」

最後に口マ書 12 章を読んで終わります。この箇所はキリスト者の生活と心構えを全部言ってくれています。長いですが、全部読みます。12:1 こういうわけで、兄弟たち、神の憐れみによってあなたがたに勧めます。自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です。12:2 あなたがたはこの世に倣ってはなりません。むしろ、心を新たにしておいて自分を変えていただき、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるかをわきまえるようになりなさい。12:3 わたしに与えられた恵みによって、あなたがた一人一人に言います。自分を過大に評価してはなりません。むしろ、神が各自に分け与えてくださった信仰の度合いに応じて慎み深く評価すべきです。12:4 というのは、わたしたちの一つの体は多くの部分から成り立っていても、すべての部分が同じ働きをしていないように、12:5 わたしたちも数は多いが、キリストに結

ばれて一つの体を形づくっており、各自は互いに部分なのです。12:6 わたしたちは、与えられた恵みによって、それぞれ異なった賜物を持っていますから、預言の賜物を受けていれば、信仰に応じて預言し、12:7 奉仕の賜物を受けていれば、奉仕に専念しなさい。また、教える人は教えに、12:8 勧める人は勧めに精を出しなさい。施しをする人は惜しまず施し、指導する人は熱心に指導し、慈善を行う人は快く行いなさい。

12:9 愛には偽りがあってはなりません。悪を憎み、善から離れず、12:10 兄弟愛をもって互いに愛し、尊敬をもって互いに相手を優れた者と思いなさい。12:11 怠らず励み、霊に燃えて、主に仕えなさい。12:12 希望をもって喜び、苦難を耐え忍び、たゆまず祈りなさい。12:13 聖なる者たちの貧しさを自分のものとして彼らを助け、旅人をもてなすよう努めなさい。12:14 あなたがたを迫害する者のために祝福を祈りなさい。祝福を祈るのであって、呪ってはなりません。



執筆中のパウロ

12:15 喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。12:16 互いに思いを一つにし、高ぶらず、身分の低い人々と交わりなさい。自分を賢い者とうぬぼれてはなりません。12:17 だれに対しても悪に悪を返さず、すべての人の前で善を行うように心がけなさい。12:18 できれば、せめてあなたがたは、すべての人と平和に暮らしなさい。12:19 愛する人たち、自分で復讐せず、神の怒りに任せなさい。『復讐はわたしのすること、わたしが報復する』と主は言われる」と書いてあります。12:20 「あなたの敵が飢えていたら食べさせ、渴いていたら飲ませよ。そうすれば、燃える炭火を彼の頭に積むことになる。」12:21 悪に負けることなく、善をもって悪に勝ちなさい。祈りましょう。



エルサレム入城

11:12 翌日、一行がベタニアを出るとき、イエスは空腹を覚えられた。

11:13 そこで、葉の茂ったいちじくの木を遠くから見て、実がなっていないかと近寄られたが、葉のほかは何もなかった。いちじくの季節ではなかったからである。11:14 イエスはその木に向かって、「今から後いつまでも、お前から実を食べる者がないように」と言われた。弟子たちはこれを聞いていた。

11:15 それから、一行はエルサレムに來た。イエスは神殿の境内に入り、そこで売り買いしていた人々を追出し始め、両替人の台や鳩を売る者の腰掛けをひっくり返された。11:16 また、境内を通して物を運ぶこともお許しにならなかった。11:17 そして、人々に教えて言われた。「こう書いてあるではないか。『わたしの家は、すべての国の人の／祈りの家と呼ばれるべきである。』／ところが、あなたたちは／それを強盜の巢にしてしまった。」11:18 祭司長たちや律法学者たちはこれを聞いて、イエスをどのようにして殺そうかと謀った。群衆が皆その教えに打たれていたのだから、彼らはイエスを恐れたからである。11:19 夕方になると、イエスは弟子たちと都の外に出

て行かれた。

11:20 翌朝早く、一行は通りがかりに、あのいちじくの木が根元から枯れているのを見た。11:21 そこで、ペトロは思い出してイエスに言った。「先生、御覧ください。あなたが呪われたいちじくの木が、枯れています。」11:22 そこで、イエスは言われた。「神を信じなさい。11:23 はっきり言うておく。だれでもこの山に向かい、『立ち上がって、海に飛び込め』と言ひ、少しも疑わず、自分の言うとおりになると信じるならば、そのとおりになる。11:24 だから、言うておく。祈り求めるものはすべて既に得られたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになる。11:25 また、立って祈るとき、だれかに対して何か恨みに思うことがあれば、赦してあげなさい。そうすれば、あなたがたの天の父も、あなたがたの過ちを赦してくださる。」11:26 （✧底本に節が欠落 異本訳）もし赦さないなら、あなたがたの天の父も、あなたがたの過ちをお赦しにならない。

11·12 Καὶ τῇ ἐπαύριον ἐξελθόντων αὐτῶν ἀπὸ Βηθανίας ἐπείνασεν. 11·13 καὶ ἰδὼν συκὴν ἀπὸ μακρόθεν ἔχουσιν φύλλα ἡ, εἰ ἄρα τι εὕρηται ἐν αὐτῇ, καὶ ἐλθὼν ἐπ' αὐτὴν οὐδὲν εὔρεν εἰ μὴ φύλλα· ὁ γὰρ καιρὸς οὐκ ἡσύκων. 11·14 καὶ ἀποκριθεὶς εἰς αὐτὴν, Μηκέτι εἰς τὸν αἰῶνα ἐκ σοῦ μηδεὶς καρπὸν φάγοι. καὶ ἤκουον οἱ μαθηταὶ αὐτοῦ.

11·15 Καὶ ἔρχονται εἰς Ἱεροσόλυμα. καὶ εἰσελθὼν εἰς τὸ ἱερὸν ἤρξατο ἐκβάλλειν τοὺς πωλοῦντας καὶ τοὺς ἀγοράζοντας ἐν τῷ ἱερῷ, καὶ τὰς τραπέζας τῶν κολλυβιστῶν καὶ τὰς καθέδρας τῶν πωλούντων τὰς περισσότερας κατέστρεψεν, 11·16 καὶ οὐκ ἤφιεν ἵνα τις διενέγκῃ σκεῦος διὰ τοῦ ἱεροῦ. 11·17 καὶ ἐδίδασκεν καὶ ἔλεγεν αὐτοῖς, Οὐ γέγραπται ὅτι Ὁ οἶκός μου οἶκος προσευχῆς κληθήσεται πᾶσιν τοῖς ἔθνεσιν; ὑμεῖς δὲ πεποιήκατε αὐτὸν σπήλαιον ληστῶν. 11·18 καὶ ἤκουσαν οἱ ἀρχιερεῖς καὶ οἱ γραμματεῖς καὶ ἐζήτουν πῶς αὐτὸν ἀπολέσωσιν· ἐφοβοῦντο γὰρ αὐτόν, πᾶς γὰρ ὁ ὄχλος ἐξεπλήσσετο ἐπὶ τῇ διδαχῇ αὐτοῦ. 11·19 Καὶ ὅταν ὥσπερ ἐγένετο, ἐξεπορεύοντο ἔξω τῆς πόλεως.

11·20 Καὶ παραπορευόμενοι πρῶτ' εἰτὴν συκὴν ἐξηραμμένην ἐκ ῥιζῶν.

11·21 καὶ ἀναμνησθεὶς ὁ Πέτρος λέγει αὐτῷ, Ῥαββί, ἴδε ἡ συκὴ ἣν κατηράσω ἐξήρανται. 11·22 καὶ ἀποκριθεὶς ὁ Ἰησοῦς λέγει αὐτοῖς, Ἔχετε πίστιν θεοῦ. 11·23 ἀμὴν λέγω ὑμῖν ὅτι ὃς ἂν εἴπῃ τῷ ὄρει τούτῳ, Ὑψοῦμαι καὶ βλήθημι εἰς τὴν θάλασσαν, καὶ μὴ διακριθῇ ἐν τῇ καρδίᾳ αὐτοῦ ἀλλὰ πιστεύῃ ὅτι ὃ λαλεῖ γίνεται, ἔσται αὐτῷ. 11·24 διὰ τοῦτο λέγω ὑμῖν, πάντα ὅσα προσεύχεσθε καὶ αἰτεῖσθε, πιστεύετε ὅτι ἐλάβετε, καὶ ἔσται ὑμῖν. 11·25 καὶ ὅταν στήκετε προσευχόμενοι, ἀφίετε εἴ τι ἔχετε κατὰ τινος, ἵνα καὶ ὁ πατὴρ ὑμῶν ὁ ἐν τοῖς οὐρανοῖς ἀφῇ ὑμῖν τὰ παραπτώματα ὑμῶν. 11·26